13　待つことが苦手な自閉症者への取り組み
ー次の活動まで安心して待つことを目指してー

自立支援局秩父学園　下川亜希子　久郷英伸　安藤幹博　藤井知亨
伊藤隆　齋藤信哉　永吉敏広　髙木晶子

【はじめに】本事例では、入所施設での日常生活場面において、帰宅や次の活動まで落ち着いて待つことができず不適応行動を起こす自閉症者に対して､視覚的な手掛かりを用いて支援を行い、その結果について考察した。

【方法】１．対象者　診断名：知的障害・自閉症スペクトラム　年齢：32 歳　発達年齢：PEP-R 1 歳 6 ヶ月　SM 社会生活年齢２歳 4 ヶ月　コミュニケーション：＜受容＞日課の活動は、写真カードから情報を読み取ることができる。落ち着かない状態の時は、情報を読み取ることは困難。＜表出＞要求は、ジェスチャーや一語文で伝える。行動特徴：次の活動まで落ち着いて待つことができず、職員にしがみつき次の活動を要求する。エスカレートすると顔面蒼白となり、他害等の不適応行動が見られる。これまでの支援：次の活動の見通しが持てるよう、日課の主な活動を写真カードにして活動の直前に呈示した。帰宅日（隔週末で帰宅）には帰宅カードを呈示したが、帰宅への期待感から強い不適応行動が出現したので、カードを呈示することを中止とした。

２．目標行動　次の活動まで、活動カード及び実物呈示を受けて落ち着いて待つことができる。

３．設定　①全体的なスケジュール：一日の日課を細分化し、活動終了直後に次の活動の写真カードを呈示する。帰宅等の要求行動の頻度が高い活動については、写真カードとバッグ等の実物を対呈示する。②待ち時間のスケジュール内容：落ちつかない時間帯に自立課題を導入し、比較的落ち着いている時間帯に、音楽を聴く活動を設定する。③週末のスケジュール内容の設定：帰宅する週末と帰宅をしない週末の日課を違う内容で組み立て、帰宅日を明確にする。

【結果】①写真カードや実物を手に、落ち着いて待つことができるようになった。②落ちつかない時間帯に自立課題を設定したことで、一定時間課題をして過ごすことができた。③帰宅する週末と帰宅しない週末の日課を変えることにより、週末の不適応行動が減少した。

【考察】　①先行刺激操作として、事前に写真カードと実物で対呈示したことで、次の活動の理解度と日課への見通しを向上させたと考えられる。実物は活動を保証し、安心感を与える強化子になったものと思われる。②対象者の状況に応じた活動の設定が有効であった。次の活動が気になる状態では、音楽を聴くような行動を静止させた状態の活動に比べ、自立課題のように自立的に行う活動の設定が有効であったと考えられる。③二通りのスケジュール設定が週末の日課に見通しを与え、結果として不適応行動が減少した。帰宅までの待ち時間に魅力のある活動を設定することで、帰宅への期待感から生じる衝動性や多動性を和らげる効果があったと思われる。

【まとめ】対象者にとって、目で見てわかりやすい形で生活の見通しを立て、順序立てて活動を組み立てることによって、不適応行動を減少させるだけでなく次の活動まで安心して待つことができるようになった。対象者の地域生活移行を見据えると、今後も待ち時間を落ち着いて過ごせることが必要となってくる。楽しめる活動をわかりやすく設定し、できる活動のレパートリーを拡げながら、次のライフステージに向けて支援を展開していきたいと考えている。